

小嶺磯吉が収集したアドミラルティ諸島のダガー（短剣）

畑中乃咲佳・山口徹

ニューギニア島の北にビスマルク群島の島々が広がる。その北縁をなすアドミラルティ諸島の主島がマヌス島である。この地域の短剣（daggers）には、エイの尾棘が柄（つか）に複数本差し込まれたものと黒曜石製石刃の資料が知られる。慶應義塾大学にはどちらのタイプも所蔵されている。本稿で紹介する資料（ME-33）は后者で、石刃と柄が分離しているため、その接続部分を含めて観察できる。



写真1 アドミラルティ諸島のダガー（2023年3月、畑中・山口撮影）

石刃を柄に装着した状態で全長 25cm を測る。最大幅は接続部の 4.0cm、厚さは 1.7cm、断面は扁平な楕円形を呈する。接続部の深さは 2.7cm で、扁平な石刃の基部を差し込む形状にくぼむ。類例資料の情報にもとづき、クリソバラヌス科に属するパリナリ（*Parinarium* sp.）の実の樹脂で石刃が膠着されていたと考えられる。おそらく柄自体も、軟質のサゴヤシ材をパリナリの樹脂で固めることで成形されている [Ohnemus 1998]。長さ 14.3cm を

測る柄は下端（柄頭）に向かって窄まる形状を呈し、膠着材の樹脂に混ぜ込まれた朱色の地に沈線や刻みがほどこされる。白色で塗られたこれら凹部に囲まれることで、群青色の文様・図柄が鮮やかに浮き上がる。しかし、群青色の顔料はメラネシアには産しない。おそらく、西洋人が綿布製衣類の漂白剤として持ち込んだレキットブルーかインディゴブルーが、現地の人々によって顔料に転用されたのであろう [Barnecutt 2007]。

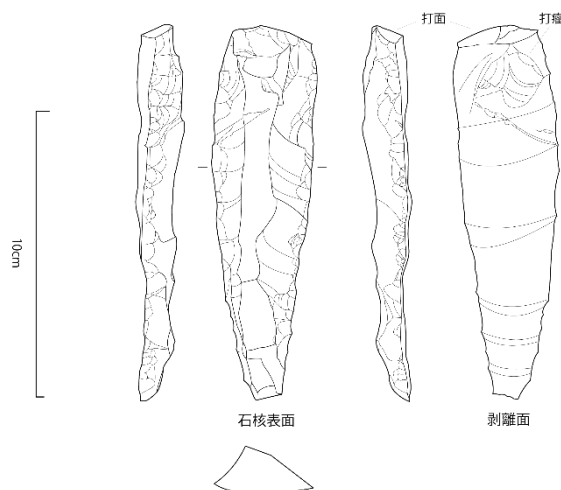


図1 黒曜石製石刃（写真とは逆に尖端を下向きに配置）

二面からなる柄の上部文様は両面で異なる。片面には、逆三角形の顔のようなモチーフが表現される。モチーフの上端は細い沈線で区切られ、下端は湾曲する太い沈線で囲われる。浮彫された逆三角形の外側には3辺ともに鋸歯状の刻みが入る。内側も彫りくぼめられ、上辺中央から伸びる垂線が鼻梁のように見える。その両側に彫り残された粒状部は地の朱色で、配置から推測すると眼球だろうか。もう片面は幾何学文で飾られる。最上部の第1文様帯は、白く彩色された沈線と下向きに刻まれた鋸歯小文からなり、先述した人面モチーフの上端を区切る沈線に連なって柄を一周する。第1と第2文様帯とのあいだは群青色で塗られる。第2文様帯は鋸歯文付き沈線2本で上下を挟まれる。上側沈線の鋸歯文は第1文様帯と同様に下向きに、下側沈線は上向きに付く。上下2本の沈線間には、3つの楕円文が浮彫りされ、中央の楕円は地の朱色が残り、両側の楕円は群青で彩色される。いずれの楕円も、彫りくぼめられた白色凹部のなかに浮き上がって見える。楕円間の上部と下部にも山形の削り残しが挟まる。上部の山形文は地の朱色のまま、下部は群青色に彩色される。また、柄の両面には上部文様帯の下に、群青色の×印が浮き上がる白色小円文が縦方向にそれぞれ3つ並ぶ。

黒曜石製の石刃は最大長 13.0cm、最大幅は 3.7cm を測る。アドミラルティ諸島では、マヌス島南東沖に位置するロウ島 (Lou) が黒曜石の主要産地として知られる。20 世紀初頭には、素材となる黒曜石ブロックや加工された石刃が交易品としてロウからマヌスの村々に運ばれていた [Fredericksen 2000]。本資料の石刃は、すでに剥離面が形成されていた石核を、打撃具で同一方向に複数回たたくことで剥ぎ取られた剥片である。石核表面の稜と同じ方向に剥離したことを示す痕跡 (リング) が剥離面に残り、打撃時に形成される打瘤 (バルブ) のふくらみも認められる。最尖端部は尖っておらず、加工時もしくは使用時の段階で欠損したと考えられるが、両側縁に細かな剥離を二次的に加えることで、刃部を直線に調整するとともに、尖端が鋭利になるよう角度がつけられている。刺突の機能を意識して製作されたことが分かる。

本資料は、小嶺磯吉による収集品の 1 点である。1901 年ごろに独領ニューギニアに渡り、ドイツ総督府の仕事を請け負いながら、造船業や採貝業、コプラ生産、南洋貿易と多角経営を展開した人物で、現地島民からさまざまな民族資料を入手したコレクターとしても知られる [臺 2020]。独領ニューギニアのなかで、アドミラルティ諸島の本格的な植民地経営は現地島民の抵抗もあって一足遅く始まった。開発の先鞭を担ったのが小嶺で、1907 年ごろから 1911 年にかけてコプラ農園や造船所を開設し、海産物漁を展開していた。ダガーの収集もこの時期だった可能性が高い。

ビスマルク群島では、植民地経営にともなう人頭税や賦役といった政策を通して 20 世紀初頭に貨幣経済が急速に浸透し、現地島民が自らの生活のために製作し使用していた民具自体が貨幣価値を持つようになっていった [山口 2015]。アドミラルティ諸島のダガーも同様で、1910 年ごろまではバーター交換のなかで貿易商人や現地行政官に譲渡されていたものが、1920 年代には西洋からの旅行者が土産物として容易く入手できるようになっていた。この社会変化にともなって、柄の文様は簡略化され、黒曜石の刃部調整が単純化した可能性も指摘されている [Torrence 1993]。小嶺のダガーはまさにその変わり目に収集された資料と考えてよい。西洋由来の群青色が使用される一方で、柄の両面で異なる図柄やその彩色、そして二次剥離によって鋭利に調整された刃部といったマテリアリティが、当時の社会的状況のなかで交換財としてどのような意味を持っていたか、その解明が次の課題となる。

参考文献

臺 浩亮 2020 「植民地期のニューギニアにおける小嶺磯吉の活動に関する予察——1905

- 年から 1911 年における収集活動を中心に」『史学』 89(3) : 1-52、三田史学会。
- 山口 徹 2015 「ウリ像をめぐる絡み合いの歴史人類学——ビスマルク群島ニューアイルランド島の造形物に関する予察」『史学』 85(1-3) : 401-439、三田史学会。
- Barneclutt, V. 2007 “Thomas Farrell: Trading in New Ireland.” in S. Cochrane and M. Quanchi (eds.) *Hunting the Collectors: Pacific Collections in Australian Museums, Art Galleries and Archives*. Cambridge Scholars Publishing, Newcastle. pp. 120-129.
- Fredericksen, C. 2000 “Points of Discussion: Obsidian Blade Technology in the Admiralty Islands, 2100BP to 50BP.” *Indo-Pacific Prehistory Association Bulletin* 20: 93-106.
- Ohnemus, S. 1998 “An Ethnology of the Admiralty Islanders: The Alfred Bühler Collection, Museum der Kulturen, Basel.” University of Hawai'i Press, Honolulu.
- Torrence, R. 1993 “Ethnoarchaeology. Museum Collections and Prehistoric Exchange: Obsidian-Tipped Artifacts from the Admiralty Islands.” *World Archaeology* 24(3): 467-481.

(はたなか・のえか 慶應義塾大学大学院／やまぐち・とおる 慶應義塾大学)